

2022 年度 日本植物分類学会 講演会

2022 年 12 月 10 日（土）午前 10 時～午後 5 時
大阪学院大学 2 号館地下 1 階 2 号教室（02-B1-02 教室）
(最寄り駅：JR 岸辺駅 / 阪急 正雀駅)
ハイブリッド形式（現地およびオンライン配信）

講演スケジュール：

- 10:00–10:10 ご挨拶 村上 哲明（学会会長 / 東京都立大学）
- 10:10–11:00 高野 温子（兵庫県立大学 / 兵庫県博）
「植物標本を活かして守る：デジタル化から
OCR データ自動抽出, AI による標本自動判定まで」
- 11:00–11:50 野田 博士（京都大学）
「ヤマノイモ属の系統分類」
(11:50–13:20 昼食)
- 13:20–14:10 伊藤 優（摂南大学）
「世界の水草よもやま話」
- 14:10–15:00 工藤 洋（京都大学）
「アブラナ科タネツケバナ属の分類・進化・生態：
見分け方から最新の研究成果まで」
(15:00–15:10 休憩)
- 15:10–16:00 須貝 杏子（島根大学）
「小笠原諸島における樹木種の進化：
エコタイプの分化や集団動態」
- 16:00–16:50 加藤 雅啓（国立科学博物館）
「分類学をいかに広げるか—カワゴケソウの調査研究から」
- 16:50–17:00 ご挨拶 林一彦（大阪学院大学）

参加申込：<https://forms.gle/gjtHM9c75a85cgm78>

* 日本植物分類学会の非会員の方のご参加も歓迎します。

* 参加者多数の場合は、早期に受付を締め切らせていただく場合があります。

* 開催方法が変更になる場合は、登録メールアドレスに 2022 年 12 月 8 日までに連絡をいたします。

* お問い合わせ：講演会担当 高山浩司 (takayama@sys.bot.kyoto-u.ac.jp)



植物標本を活かして守る：デジタル化から OCR データ自動抽出、AI による標本自動判定まで 高野 温子（兵庫県立大学 / 兵庫県博）

人と自然の博物館では、岩槻邦男名誉館長から寄付を受けたことを契機に、アルバイトにも撮影可能な高精細標本デジタル画像撮影装置を開発し、現在までに約 25 万点の標本画像を取得した。撮影作業と並行して標本デジタル画像からのラベルデータ OCR（光学文字認識）自動抽出システムの開発を行い、標本データ入力作業の一部自動化・省略化・リモート化を実現してきた。また島根大・福島大・鹿児島大等と共同で、大量の標本画像を用いて AI による標本画像の種自動判定システムを構築した。本講演ではこれらシステムの紹介と、植物標本画像化のメリットおよび標本画像活用法についてお話ししたい。

ヤマノイモ属の系統分類

野田 博士（京都大学）

熱帯を中心に、温帯まで分布域を広げるヤマノイモ属 *Dioscorea* は、世界に 600 種以上が知られている。多くの種はつる性で蒴果をつけるが、中には液果をつけるもの (*Tamus*) や木本化するもの (*Testudinaria*) もある。また、茎の左巻き／右巻き、葉の互生／対生、単葉／複葉、根茎／塊茎など属内に多様な形態を見ることができる。本講演では、旧世界のヤマノイモ属を中心に、多様なヤマノイモ属の進化の道筋をたどり、私達が一昨年提案した旧世界のヤマノイモ属の新しい分類を紹介する。また、日本産ヤマノイモ属については、特にヤマノイモ、ユワンオニドコロ、キールンヤマノイモ、大東島のルゾンヤマノイモの識別が難しかったが、私達は大東島のルゾンヤマノイモをキールンヤマノイモの誤同定と考えた。これを含め、私達が今年発表した日本産ヤマノイモ属の分類に関する研究成果についてもお話しする。

世界の水草よもやま話

伊藤 優（損南大学）

分類学における水生植物研究の難しさの一つは、その多くが世界に広く分布していることである。演者は学生時代よりこれまで、世界各地の池や沼、湖、川、海で現地調査をしながら、様々な分類群の分子系統を進めてきた。このうち、学位取得前後に行った研究については、以前、日本植物分類学会奨励賞受賞講演でお話させて頂いた。そこで本講演では、ポスドク時代に行った、海外の研究者との共同研究をきっかけに発展したガマ科ミクリ属やトチカガミ科イバラモ属、ホシクサ科ホシクサ属、ゴマノハグサ科キタミソウ属、オオバコ科アワゴケ属などの研究について、オムニバス形式で紹介したい。

アブラナ科タネツケバナ属の分類・進化・生態：見分け方から最新の研究成果まで

工藤 洋（京都大学）

アブラナ科タネツケバナ属は世界各地に分布する約 200 種からなり、日本には 20 数種が分布する。この属の植物は同定・分類が難しく、また学名の取り扱いにも変更が生じている。例えばタネツケバナには、ヨーロッパの植物と同じ *Cardamine flexuosa* という学名をあててきた。ところが最近の研究によって、タネツケバナは別の植物であることが明らかとなり、正しい学名として *Cardamine occulta* が選定された。タネツケバナ属は、分類学的な研究だけでなく、生態、進化、外来生物、分子生態といった様々な視点での研究の対象となっている。見分け方から最新の研究成果まで、様々なトピックスを取り上げて紹介する。

小笠原諸島における樹木種の進化：エコタイプの分化や集団動態

須貝 杏子（島根大学）

小笠原諸島は他の陸地と繋がったことのない海洋島であり、多くの固有種が分布し、特異な生態系が形成されている。私たちは、複数の樹木種において、野外調査と遺伝解析を組み合わせて研究を進めてきた。多様な環境に進出して、それぞれ遺伝的に分化したエコタイプを形成している分類群もあれば、形態的差異は大きいものの島内で遺伝的分化がみられない分類群もあることが分かってきた。本講演では、ホルトノキ属、ムラサキシキブ属、アカテツ属などを取り上げて、小笠原諸島での多様化や集団動態について紹介したい。

分類学をいかに広げるか—カワゴケソウの調査研究から

加藤 雅啓（国立科学博物館）

カワゴケソウ科は、雨期はずっと水没したままであるが、乾期になると露出して枯死する一方で開花結実するという生態的にも、形態的にも奇異な水生植物である。これまで東南アジアなど各地で調査を重ね、この植物のもつ「面白さ」（主観的ではあるが普遍性があるだろう）を引き出そうと努めてきた。それによって、ある地域に種属が原因不明ながら集中すること、3 系統学的種が認められること、多様性の一部は非適応進化に因るかもしれないこと、2 段階進化が起こったことなどが明らかになった。その他、着生植物の進化、溪流沿い植物の進化、ゼンマイの多様化・生物地理などの研究にも触れる。